

## 29. $^{123}\text{I}$ -MIBG シンチグラフィによる Neural crest tumor の描出

大塚 博幸 壇 芳之 山口 晴司  
 伊藤 秀臣 増井裕利子 尾藤 早苗  
 太田 圭子 才木 康彦 日野 恵  
 池窪 勝治 (神戸市立中央市民病院・核)  
 石原 隆 服部 尚樹 森寺邦三郎  
 倉八 博之 (同・内分泌内)

1993年1月から1994年1月までの1年間に22症例において施行した $^{123}\text{I}$ -MIBG または $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチグラフィの有用性につき比較検討した。褐色細胞腫の2例においては同時期に施行した $^{123}\text{I}$ -MIBG と $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチグラム像を比較した。

副腎褐色細胞腫の1例では $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチグラフィでは全く腫瘍が検出されず、 $^{123}\text{I}$ -MIBG で明瞭に描出された。他の多発性転移の1例では $^{123}\text{I}$ -MIBG シンチグラム像は $^{131}\text{I}$ -MIBG に比べてより多数の病巣が明瞭に描出され病巣の広がりがより明らかであった。また $^{123}\text{I}$ -MIBG により褐色細胞腫1例と、神経芽細胞腫3例と髓様癌1例のすべてが描出された。

Neural crest tumor および副腎疾患以外の7症例における $^{123}\text{I}$ -MIBG 分布像では、正常副腎が高率(86%)に描出され、 $^{131}\text{I}$ -MIBG 施行の2例に比較して画質が優れた。

$^{123}\text{I}$ -MIBG が $^{131}\text{I}$ -MIBG より画質が良い主な理由は、前者が後者に比べて比放射能が高く、かつ投与量が多い上に $^{123}\text{I}$ がシンチグラフィに適したエネルギーをもつためであり、Neural crest tumor の局在診断には $^{123}\text{I}$ -MIBG の方が優れると考えられた。

## 30. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI の集積を認めた悪性リンパ腫の2症例

松井 律夫 小森 剛 田渕耕次郎  
 難波隆一郎 辰 吉光 足立 至  
 清水 雅史 末吉 公三 河合 武司  
 楠林 勇 (大阪医大・放)

症例1、65歳、男性、SVC syndrome で発症、CT にて上縦隔に腫瘍を認め、 $^{67}\text{Ga}$  シンチにて同部 hot lesion を呈した。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI SPECT および $^{201}\text{Tl}$ -

SPECT early image にて腫瘍に一致した強い RI の集積を認めた。それぞれ early ratio は 2.7, 5.1. delayed image では  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI の集積は低下、 $^{201}\text{Tl}$  の集積は不变であった。それぞれ delayed ratio は 3.6, 7.3. 手術の結果 malignant lymphoma diffuse large cell type と診断された。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI の集積は腫瘍に一致し、腫瘍に伴う血栓を区別できた。

症例2、81歳、女性。右眼瞼腫脹、眼瞼下垂にて発症、CT にて右眼窩内に腫瘍が認められた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI SPECT early image にて腫瘍およびリンパ節腫脹に対し強い集積が認められ、delayed image にてやや wash out された。early ratio は 5.5, delayed ratio は 2.7.  $^{201}\text{Tl}$ -SPECT でも腫瘍およびリンパ節腫脹に対し、明瞭な集積が見られ、wash out 不良であった。early ratio は 5.2, delayed ratio は 5.4. 眼窩内腫瘍およびリンパ節腫脹に対し、生検が行われ、malignant lymphoma, B cell type と診断された。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MIBI は種々の腫瘍に集積することが知られており、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  製剤であるため、良好な画像が得られる。今回2例の未治療の malignant lymphoma に対し、early image にて良好な集積を示し、良好な画像が得られ、腫瘍の局在範囲の診断に役立った。wash out は1例は不良、1例は良好であったが、その意味は不明であり、今後検討していきたい。

## 31. 舌・上顎洞悪性腫瘍のFDG-PET

### —MRIとの対比—

河辺 譲治 羽室 雅夫 細川 知紗  
 井上 佑一 池田 裕子 土田 耕正  
 小野山靖人 (大阪市大・放)  
 岡村 光英 越智 宏暢 (同・核)  
 坂本 浩一 (同・耳鼻)

FDG-PET を施行した上顎癌2例、舌癌1例について報告した。症例1は76歳男性、主訴は左鼻出血。造影 X 線 CT で左上顎洞に不均一な濃度を示す腫瘍が認められ、MRI では腫瘍の内側が T1WI で低信号、T2WI で内部不均一な高信号を呈し、造影 MRI で内部不均一に造影を受けた。一方腫瘍の外側は T2WI でやや低信号を示し淡く造影を受けた。FDG-PET では腫瘍の外側に強い集積を認めた。PET 検査の翌日の開放生検で FDG の集積と一致する左上顎洞